

アレルギーの意外な危険と対処法

アナフィラキシーとの身近な関係

アレルギーは食物アレルギー、花粉アレルギーなどという症状でよく耳にしますが、「大したことない」などと軽視していると、アナフィラキシーと呼ぶショック症状で重篤な状態に陥ることがあります。幼少期から思春期にかけては食べ物に対するアレルギーを持つお子さんも多く、子育てに気を遣っている方も多いのではないのでしょうか。今月はそんなアレルギーに関するお話です。

先日、学校の嘱託を受けている小学校で、職員向けに

「重症なアレルギーが起こった時の対処方法」をお話ししてきました。給食などの食べ物、ハチに刺された場合などで急にアレルギー反応が起きる時、命にかかわる場合があるからです。

そもそもアレルギーとは、体の中に入ってきた異物を排除する働きが過剰に起こる現象です。目にかかる「アレルギー性結膜炎」、鼻にかかる「アレルギー性鼻炎」など、症状が発生する体の部位から病名がつく場合、花粉症、食物、薬など原因物質によって病名がつくアレルギーもあり

ます。

「アトピー性皮膚炎」「気管支ぜんそく」「じんましん」など、アレルギーがさまざまな病気に関与している場合もあります。

北海道の花粉症は、代表的な原因物質の一つとしてシラカバ花粉が挙げられます。そのアレルギーという方は、バラ科の果物を食べる時に注意が必要です。

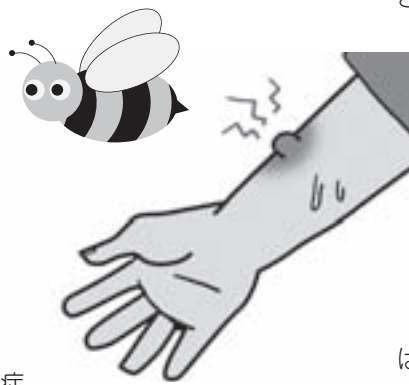
その原因物質と果物に含まれている物質が似ているためです。リンゴ、西洋ナシ、サクランボ、モモなどを食べて口の中がかゆくなったり、唇が腫れたりする方は、バラ科のアレルギー物質反応が起き

ていることがあります。

アナフィラキシーはその場で対処し急いで病院へ

アレルギーが引き起こす「アナフィラキシー」と呼ぶショック症状が出る場合は、死亡するケースもあるため緊急対処が必要で

す。夏場はハチに刺さる方が数多くいらっしゃいます。同



じ種類のハチに複数回刺されると、3〜12%の人がアナフィラキシーを起こすといわれています。アレルギーがあるかどうかは血液検査で分かる場合がありますので、診療所でご相談ください。

アナフィラキシーは、アレルギーを引き起こす異物（アレルゲン）が体内に入ると、急激にじんましん、ぜんそく、血圧低下など、重篤な状態のアレルギー症状を示す症状です。

症状が出てからわずか30分間ほどの間に命に係わる状態になるので、できるだけ早く現場で対応する必要があります。

以前アナフィラキシーを起こしたことがある人は、「エピペン」というアナフィラキシー治療補助薬を処方することがあります。

本人が重症で使用でき

ない場合、周りの家族や教職員が使用する手助けをしてあげなければなりません。救急車で重症管理のできる大きな病院へすぐに搬送する必要があります。

アナフィラキシーの原因物質はさまざまですが、医薬品による死者が最も多く、次いでハチ毒、食べ物と続きます（平成23年厚生労働省調べ）。

食べ物では、幼児期ではソバ15・3%、鶏卵14・1%、ナッツ類11・8%が多く、小学生から思春期では、果物類21・9%、甲殻類17・1%、小麦15・2%と続いています。年齢が変化するに伴って原因物質が変化しているのが分かります（同20年同）。

これは耐性獲得という現象です。ヒトは、ある種のアレルギー原因物質を摂取した場合、年を重ねることに症状が起こらなくなる場合があることを示しています。

町立診療所副所長

古川倫也